

観光人類学における「ホストとゲスト」の相互関係

渡部瑞希*

要旨

従来の観光人類学は、観光地での「ホストとゲスト」¹の相互関係を論じるため、主に二つの議論を精緻化してきた。一つは、「ホストとゲスト」の関係を演じられたものとする演出行為論である。これは、観光の場でのホストとゲストが、互いの利益や願望のためにどのように演技をしているかを論じている。二つ目は、「ホストとゲスト」の間に力関係を想定する文化の客体化論である。文化の客体化論では、ホストを、観光の「犠牲者」としてではなく、観光という抑圧的な構造の中から自身の伝統文化やアイデンティティを選択・構築する“主体的”な存在ととらえている。

本稿の目的は、「ホストとゲスト」の相互関係を論じるこれら観光人類学の主要理論を概観し、その可能性と限界点を提示することである。

キーワード：「ホストとゲスト」、相互関係、演出行為論、文化の客体化論

目次

はじめに

演出行為論

- 1 演出行為論の基盤 MacCannell の議論
- 2 演出行為論で見る「ホストとゲスト」の関係
- 3 演出行為論の限界点

文化の客体化論

- 1 客体化論の目的とその意義
- 2 客体化論を利用する観光人類学議論の特徴
- 3 客体化論の限界点

結論

*一橋大学大学院社会学研究科博士課程

¹ 本稿において、「ホストとゲスト」という表現は、V. Smith 以降の「ホスト&ゲスト」論を踏襲する議論と、「ホストとゲスト」をさまざまな行為体や組織の代名詞 たとえば現地の観光事業団体、観光開発者、企業家 として用いるときに、そして概念用語 「ホスト= “見られるもの” / ゲスト= “見るもの”」 としても使用する。また「」のつかないホストとゲストは、実際に観光地で相互行為するひとびとを指すときに用いる。

はじめに

現在、観光地は、さまざまな人種、国籍、民族的背景をもつひとびとが集う異種混交とした空間を形成している。文化的背景を異にする他者との一瞬の出会いや相互行為の中で、観光地でのホストとゲストは、誤解や軋轢、カルチャー・ショックを経験したり、親密な関係を築くこともある。観光人類学は、このような観光地に集う多様なひとびとが織り成す関係性を、「ホストとゲスト」の相互関係に着目して論じてきた。

「ホストとゲスト」という枠組みを最初に用いたのは V. Smith である。彼の編著『ホスト&ゲスト』[Smith 1977(1991)]では、観光の状況下において、ホストが受ける社会的・経済的インパクトや、ゲストの旅の動機や経験の多様化、ホストとゲストの相互関係に関する論考が提示されている。すなわち、この著書では「ホスト」と「ゲスト」の個別的な現状と、「ホストとゲスト」の相互関係を扱う論考とがある。本稿では、主に後者の議論に着目する。

観光人類学において、「ホストとゲスト」の相互関係を扱う議論は大きく二つに分けることができる。一つは「ホストとゲスト」が観光の場を成功させるために演出していることに着目し、その演技性を論じる議論である。本稿では、この種の議論を演出行為論と総称する。演出行為論では、ホストとゲストは接触前に演技の準備をする役者であり、観光の場はその演技を披露する舞台であると説明される。たとえば、ゲストは舞台に出る前にガイドブックを読み、持ち物を検討し、外国語の辞書に急いで目を通す。ホストは、ゲストが満足するような「現地らしさ」を仲間内で検討し、照明と小道具を用意し、親しみ深い笑顔の稽古をする[Nunez 1977(1991):375]。演出行為論でホストとゲストの関係をみる議論では、両者が観光の場でどのように演技するか、その演技にどのような意味があるのかを論じる。

二つ目は、ホストとゲストの力関係に注目して立論する文化の客体化論である。太田は、土着の伝統を観光商品に変え、形骸化させるものとして観光をとらえる語り口が、ホストの創造力や主体性を否定してしまっていると批判する。そこで、エキゾチシズムに訴える観光形態には確かに抑圧的な構造があると認めた上で、観光を担うひとびとが、いかにその構造に抵抗するか、そうするために外部から押し付けられた観光イメージをいかに利用するかという、ホストの実践に焦点をあてた。

本稿では、観光人類学で精緻化されてきたこれら二つの議論が、観光地に集うひとびとの相互関係の多様さ、複雑さをどれほど描き出せているか、という問題にとりくむ。そこで、V. Smith の編著である『ホスト&ゲスト』[1977(1991)]以降、観光人類学が「ホストとゲスト」の相互関係をどのように論じてきたかを検討し、その利点と限界点を提示することで、今後の観光人類学が両者の相互関係を論じる際の方向性を示したい。

演出行為論

1 演出行為論とは何か

本節では、観光現象がどのように論じられ、観光の場がどのように規定されてきたかを概観するため、観光人類学の古典的な研究とされる Boorstin[1964]と MacCannell[1974]の議論をとりあげる。本稿では、これら二人の論者が推進した議論を演出行為論と総称し、それを用いる観光人類学がホストとゲストの相互関係をどのように議論しているかをまとめる。

Boorstin は、観光が大衆化され産業的に組織された歴史を詳細にとりあげた最初の論者である。Boorstin によれば観光産業は 19 世紀の欧米で発展したという。19 世紀以前、旅は経済的負担、苦痛や困難がともなうやっかいなものであったが、それは未知の世界を経験することができる冒険旅行であったため、若者貴族や裕福な知識人たちは、経験知やステータスをあげるために旅行に赴いた。しかし、19 世紀以降、通信技術の発達や交通網の資本主義経済の発展にともない、このような冒険旅行は旅行会社や代理店等の機関が企画・運営する「観光」にとって代わった[Boorstin 1964(1981): 90-95]。観光でひとびとが見聞きするものは、“本当のもの”が形を変えた商品となったのである。すなわち、Boorstin は、19 世紀の欧米で能動的で生産的な「旅行」から受動的で消費的な「観光」への構造的な転換がおきたと主張したのである。

Boorstin は、このような観光において、綿密な計画や企画にもとづいてあらかじめつくられた旅程やイベントを「擬似イベント」とよんだ。Boorstin の議論において、近代的ツーリスト²は“真正な世界”から目をそらし、「擬似イベント」を求める存在として説明される。つまり、彼らは観光の経験が「擬似イベント」であることを認識しており、その“虚偽性”を求めて観光地へ赴くのである。

一方 MacCannell は、観光が「擬似イベント」であることは認めるが、Boorstin とは異なり、観光の場で近代的ツーリストが求めるものは「擬似イベント」ではなく“真正な世界”³であると論じる[MacCannell 1976: 103-104]。ここでいう“真正な世界”とは、近代的ツーリストが日常生活を送る近代資本主義社会とはかけ離れた対照的な世界、すなわち“伝統社会”のことである。MacCannell によれば、近代資本主義社会でのひとびとは本当の自分を隠して演技しながら日常生活を送らなければならないため、家族や隣人に対する“本物の”愛着や“本物の”労働の喜びを経験したい、垣間見たいと望んでいる

² V. Smith の『ホスト&ゲスト』(1977)以降、観光へ訪れる者を「ゲスト」と称する傾向にあるが、観光人類学においてはゲストと同義語の「ツーリスト」という用語も頻繁に使われており、用語の統一がみられない。そこで本稿では、それぞれの観光論者が使用する用語に従って、「ゲスト」と「ツーリスト」を使い分ける。

³ 本稿において、“本物”“真正性”の“ ” 使用は、伝統文化や社会に本質的な“真正性”を認める議論や語り口を用いる。一方、ホストが自身の伝統文化について語るときの真正性や本物は“ ” をはずして記述する。

[MacCannell 1976: 91]。そのためツーリストは、近代資本主義社会とは対照的な“ 伝統社会 ”、すなわち、観光の場に赴くのだという。しかし、近代的ツーリストが観光の場に求める“ 伝統社会 ”とは、実は“ 真正性 ”が演出された“ 偽りの世界 ”にすぎないというのが MacCannell の議論である。

以上のことから、MacCannell は Boorstin と同様、「観光 = “ 偽物 ”」であることは支持するが、どこに“ 真正性 ”を求めるかが異なっている。すなわち、Boorstin は旅行に“ 真正 ”を求め、MacCannell は伝統社会に“ 真正性 ”を求めている。いずれにせよ、Boorstin も MacCannell も“ 真正 ”と“ 偽物 ”の二項対立にもとづいて思考しているのである。

ここで着目すべきことは、MacCannell が、観光の場を近代資本主義社会と同じ“ 偽りの世界 ”と解釈している点、そして、そこで相互行為するひとびとはみな、観光という舞台を成功させるために演技していると解釈する点である⁴。このような MacCannell の議論をふまえた理論全般を、本稿では演出行為論と総称する。次節では、演出行為論からみたホストとゲストの関係の特徴を、主に橋本[2001b]の事例研究から明らかにする。

2 演出行為論で見る「ホストとゲスト」の関係

演出行為論では、観光の場を“ 偽りの世界 ”とみなしている。このような場において、ホストとゲストの相互関係はどのように論じられるのか。それは、ホストとゲストが観光の場で演技をしているため、両者の個別的で親密な友好的関係は見受けられないという議論である[Nash 1977(1991):63-64、Nunez 1977(1991):375]。たとえば、山下は“ 真正な ”バリ文化を求めるツーリストと経済効果を期待するバリ人の間で、バリ人がいかに意図的にツーリストのイメージに合わせた“ 本物の伝統文化 ”を演出しているか、という様子を描き出す[山下 2000:116-133]。この演出行為において、ホストとゲストのコンタクト・ゾーンで起こっていることは、両者の個別的な社会的相互行為ではなく、観光産業や州政府によって仕掛けられた役者としての振る舞いなのである。

しかし、観光の場でのホストとゲストの個別的な接触や友好関係を取りあげる議論も提

⁴ MacCannell はアーヴィング・ゴッフマンの上演モデルを観光の場に応用し、観光の場を、ホストがゲストの欲望やニーズ(“ 真正な伝統文化 ”を垣間見たいなど)を満たすための舞台ととらえた[MacCannell 1976:91]。舞台化された観光の場についての研究は、MacCannell 以降も多数提出された。例えば、舞台化された空間に配置される物質はそれぞれのパフォーマーのために象徴的意味が配慮されていることを強調する Chaney[1993]、舞台化された観光の場でツーリストがホストやガイドの要求に沿って、望ましい「ゲスト」の役割を演じる様子を論じた Edensor[2000]、フーコーの議論を引用しながら観光の場がパフォーマーたちを監視する一つのシステムであることを議論する Ritzer and Liska[1997]などがあげられる。いずれの研究も観光の場が“ 舞台化された虚偽の場 ”であるということを前提としている。しかし、彼らはそのように舞台化された観光の場自体を問題関心としており、ホストとゲストの相互関係についてはほとんど言及していないので、本論で大きくとりあげることは避ける。

出された。たとえば橋本[2001a]⁵は、このようなホストとゲストの詳細なやりとりを交換論「商品交換・贈与交換」を用いながら説明した。

橋本の議論に入る前に、人と人との間でやりとりされるモノの交換形態として、商品交換と贈与交換の概念整理をしようと思う。商品交換とは、通常、市場取引における商品と貨幣の交換であり、異邦人や敵対者で行う交換を指す。一方、贈与交換は、主に親族・友人などの親密な関係にある人々の間で取り交わされる交換であり、贈与者は送ったものに対して見返りを求めることはしない。商品交換と同様、贈与交換にも「返礼の義務」は生じるが、贈与交換は商品交換とは異なり、この返礼が等価価値の下で行われるとは限らない⁶。しかしこれら二つの交換形態はあくまで分析概念であり、実際の交換の場では商品交換と贈与交換がそれぞれ構成比率を変えつつ混在しているという。このことは、資本主義世界の中核をなす巨大な産業国家社会でなされる商品交換においても、贈与交換における人格的な性質が失われたわけではないことを示している[内堀 1997:15, ゴドリエ 2000:19]。このような視点から、すぐれて市場交換的な側面をもつ観光においても、ホストとゲストの間にある贈与関係をみることは十分に可能である。

南太平洋フィジーの祝宴という儀礼的文脈において、ホストとゲストがいかなる事物を交換し、いかなる関係を構築するかを検討した橋本の議論はその一つの事例である。フィジーにはゲスト（親族、異邦人、客、ツーリスト）を盛大にもてなす「ヤングナ」という伝統儀礼がある。儀礼ではフィジー社会の接待でもっとも重視される「飲」と「食」が整備され、贈与交換用の品物も大量にそろえられる。「気前のよさ」がフィジーにおける接待の伝統的な精神である。歓迎儀礼では、ゲストは最初「ヴーランギ（客人）」と呼ばれるが、送別儀礼では「ヴェイウェカニ（親族同士）」になったと語られる。ホストとゲストは差異性を際立たせながら、最終的には両者の「統合性」を深めることが目的とされる。

橋本は、この祝宴の際、同一の文化コードを共有していると思われる村落間・地域間のゲストと異邦人としてのツーリストとで、ホストとゲストの間でとりかわされる交換の性質が異なると指摘する。ローカルな儀礼では、ホストが返礼を求めずに寛大に与える贈与交換が原理である。一方、ツーリスト相手の観光の場では商品交換が働くという。たとえば、ホストのもてなしに対するツーリストの返礼は、現金やキャンディー、布地であり、最終的に均衡状態になるよう図られているのである。

この二つの交換関係を、橋本は「統合モード」と「取引モード」という用語で説明する

⁵ ここでの橋本の議論は、演出行為論でホストとゲストをとらえているが、三章では、演出行為論的なアプローチをとらない橋本の論考[2001b]をとりあげる。後に説明するように、本稿では、橋本の後者の議論を評価している。

⁶ 本稿での商品交換と贈与交換の概略は、モース[1962]、岩井[1992]、ゴドリエ[2000]、Gregory [1982]の要点をまとめたもので、ここでは交換論の詳細な検討は控える。ここでとりあげる交換論の説明は、あくまで橋本の議論を説明するための補足的なものなので、ここで交換論に関する詳細な議論はとりあげない。

が、観光用の歓迎儀礼でツーリストを満足させるには「取引モード関係」に「統合モード関係」のニュアンスを加える必要があるという。たとえば、ツーリストは、ホストと共飲・共食し、ダンスの輪に入り握手を交わすことで、ホストとの距離を縮める「統合感」を得ることができるのである。しかし、橋本は、このような歓迎儀礼においてホストとゲストの間に二つの交換関係 商品交換と贈与交換 が存在することを認めながら、この「統合感」を「統合の幻想の演出」と結論付けるのである。

橋本の議論からもわかるように、演出行為論では、ホストとゲストの多様な相互関係や行為を見出しても、それは観光という場を成功させるための演技である、すなわち“偽物”“幻想”と解釈される。

3 演出行為論の問題点

橋本は、観光の場でのホストとゲストの関係に、打算的な商品交換関係の要素と、人間的なつながりを重視する贈与交換関係が混在していることを認めているが、実際の民族誌研究では、このような贈与交換の要素を、観光の場を円滑に運営するために演出された虚偽の関係であると結論づけている。なぜ、このような一枚岩的な結論に至るのか。それは、演出行為論を利用する論者が、MacCannell が想定した「伝統社会 = “真正”」「近代資本主義社会 = “偽物”」という構図を実体的にとらえているからである。これらの論者にとって、“真正な伝統社会”は資本主義以前、あるいはその体制の外側にしか存在しないため、資本主義産業の一形態として生じた観光の場も“偽りの世界”であると解釈される。したがって、そのような世界で相互行為するホストとゲストの関係も演技、すなわち“偽り”や“幻想”であるととらえられたのである。

このような議論の限界点を、太田は「文化の客体化」[1993]の論考で示していると考えられる。太田は、実体としての“真正な文化”の存在を認めるのではなく、現在を生きるひとびとの解釈の結果としての“真正な文化”をとりあげるべきであると述べる[太田 1993:391]⁷。つまり、“真正な文化”が現在のひとびとの相互行為の結果として構築された

⁷ ただし、太田の文化の客体化論は、演出行為論に対してではなく、後で示すように、観光に対する「帝国主義批判」の語り口に対して提示されている[1993; 2001]。MacCannell の演出行為論に対する太田の主張は、「エコロジー意識の観光人類学」(1996)の論考の中で示されている。その中で、太田は、ホストが他者のイメージにそって「演じる」ことは認めているが、その演技とイメージの間には<ズレ>があるという。そして「その<ズレ>を観光客に許容させることから、エコ・ツーリズムは文化復興やアイデンティティを主張するための装置として機能する可能性をもっている」と述べる[太田 1996:218-219]。しかし、その<ズレ>がどのようなものであるか、その<ズレ>を観光客がどのように受け取っているかという事例を、太田は提示していないため、その主張を本論で詳細にとりあげなかった。また、「(ホストの)演技が完全ではない」[太田 1996:218]という太田の切り口は、ホストの演技性を認めていると考えられるため、本稿で示すような演出行為論の限界点を太田が直接示しているとはいえない。しかし、太田が別の論考で提示した『文化の客体化論』は、演出行為論の限界点を示するのに重要であると考えたので、本論でその筋で大きくとりあげることにした。

ものと解釈しているのである。このような太田の指摘によって、演出行為論のように観光地で観察できるホストとゲストのさまざまな関係を“偽物”“幻想”と結論付けることなく、ホストとゲストの語りや実践から、彼らのさまざまな関係性をみるのが可能となった。

“真正な文化”に対する太田のアプローチ方法は、演出行為論が依拠する“真正”と“偽物”という二項対立を批判する上で画期的である⁸。次章では、太田の客体化論はどのような議論なのか、そして、この理論を利用することで、ホストとゲストの関係はどのように論じられるのかを検討する。

文化の客体化論

1 客体化論の目的とその意義

1980年代から90年初頭、観光人類学では「伝統の創造論」の文脈で観光文化をとらえる傾向にあった。それは、観光産業の浸透によって商品化され形骸化してしまった伝統文化のあり方に着目し、そのような影響力のある観光を非難する形で論じられる[江口 1998, Greenwood 1977(1991)]。たとえば、Greenwood は、スペインのバスク地方で、毎年恒例であったアラデーの祭りが観光化されることで、その祭りがひとびとの歴史的アイデンティティを高揚させる目的から観光産業や議会、地方自治体の利益のために商品化されたことに憤る⁹。つまり、Greenwood は、現地のひとびとから伝統文化の“本当の意味”を奪ってしまう文化の商品化を批判しているのである[Greenwood 1991:248]。

しかし太田は、このような観光産業の浸透が現地の“真正な伝統文化”を変容させてしまうという「帝国主義」批判¹⁰の語り口が、ホストを支配的な社会勢力の犠牲者として語り続けることになり、文化の担い手としてのホストの実践を不可視にしてしまうという[太田 2001:61]。そこで、「伝統の創造論」が“真正な文化”を批判しながらも、創造されたものではない“真正な文化”を想定していることに対して、太田は、実体としての“真正な文化”想定するのではなく、現在のひとびとの選択・解釈の結果としての真正な文化という考えが存在すると述べる[太田 1993:391]。そして、このような選択・解釈の過程を文

⁸ 太田の他にも、このような構築主義的な手法を主張する論者に Cohen[1988]があげられる。「商品化は、文化的生産物の意味を変化させたり、新たな意味を付け加えたりするかもしれないが、必ずしも文化的生産物の意味を破壊するものではない」[Cohen 1988:371]という Cohen の主張は、「伝統の創造論」に対する疑問を提示していると思われる。そして、文化的生産物が歴史的に構築された過程を研究すべきである[Cohen 1988:374]という主張は、太田のそれとほぼ同じであると考えられる。

⁹ しかし、Nash による「観光と帝国主義を単純に結びつけた議論は回避すべき」という意見を受けて、後に彼はこの議論を変えたようである。

¹⁰ 19世紀にはじまった観光開発は、ヨーロッパの帝国拡大と同時進行していたという歴史的事実がある[井野瀬 1996:35-37]。そのため、現在、先進国の資本でおこなわれる発展途上国の観光開発も、このような歴史的な流れを受けて「新・植民地主義」や「新・帝国主義」と批判される現状があるという[石森 1996:21]。たとえば、観光と植民地主義との関連を論じた永淵[2005]の論考がある。

化の客体化¹¹として理論化し、次のように説明した。

簡潔に表現すれば、文化の客体化とは、文化を操作できる対象として新たにつくり上げることである。そのような客体化の過程には当然、選択性が働く。すなわち、民族の文化として他者に提示できる要素を選び出す必要が発生する。そして、その結果選ばれた文化は、たとえ過去から継続して存在した要素ではあっても、それが客体化のために選択されたという事実から、もとの文脈と同じ意味をもちえない。いわゆる伝統的とみなされてきた文化要素も、新しい文化要素として解釈し直されるわけだ [太田 1993:391]。

太田は、そのような文化を構築する担い手として特にホストをとりあげている。そして、観光現象が前提とする「ホストとゲスト」の差異を、両者の力関係の不均衡ととらえ、客体化の過程から明らかとなるホストの実践を、このような力関係の行使に対する抵抗と解釈した [太田 2001:70-71]。

そのようなホストの実践の事例として、太田 [1992,1993,2001] は、沖縄の観光の目玉である「ウミンチュ体験コース」をとりあげ、ホスト（漁民）が“主体的”に観光文化を操作・構築している様子を論じる。太田は、漁民の潜水技能や料理の腕、物怖じしない態度、陽気さ、明るさ、優しさを評価する観光客に言及し、そのような観光客の反応によって、自己の仕事に誇りと自信を持ち、堂々とした態度で接客する漁民の姿を説明している。そして、この事例から、太田は、観光地において“見られるもの”としての漁民ではなく、観光地での実践を通して、逆に観光客より高みに立つ漁民の姿を明らかにしたのである。つまり、太田は“ホスト=見られるもの”“ゲスト=見るもの”¹²という力関係を逆転、あるいは中和させる客体化の過程を、ホストの抵抗の実践と説明しているのである [太田 2001:71]。

演出行為論も客体化論も、観光の場や観光用の文化を操作しつくり上げている「ホスト

¹¹ 文化の客体化は、植民地研究において Handler and Linnekin [1984]、Otto [1992]、Thomas [1992,1994] 等によって精緻化された理論である。太田は、他者との差異を反転させて自己像や伝統文化をつくりあげるといふ、植民地研究のアイデアを観光人類学に応用したと考えられる。しかし、植民地研究と太田の議論では着目点は異なるように思われる。たとえば、Thomas [1994] は、植民地時代のフィジーにおいて、さまざまな行為体 植民地高官、宣教師、人類学者、写真家、現地住民 が、複雑でアンビバレントな相互表象を行いながら、植民地の現状をつくり上げていたと論じる [Thomas 1994:4]。Thomas の論点は、それらのひとびとの実践を既存の植民地権力に対する抵抗とみなすというよりも、むしろそのような権力関係にとられないひとびとの相互実践をとりあげているのである。一方太田は、客体化の構築の過程において、特に力関係に対する抵抗の実践に着目している。

¹² 観光地や観光文化がゲストの“まなざし”によって形成されていくと論じたアーリ [1989] の議論を参照した構図と考えられる。

とゲスト」に着目しているといえる。しかし客体化論では、操作しつくり上げるホスト(とゲスト)の実践に積極的な意義を見出している点で、演出行為論とは異なる。太田の客体化論によって、観光地でのホストが主体性やアイデンティティを獲得する実践を論じることが可能となり、その実践からホストとゲストの相互関係を分析することもできるかもしれないのである。

2 客体化論を利用する観光人類学議論の特徴

客体化論を利用する論考では、ホストとゲストの相互関係というよりも、ホストの実践に焦点を当ててきた。なぜなら、客体化論の主張は、従来の“ホスト=見られるもの”“ゲスト=見るもの”という構図で観光文化やホスト社会のあり方を論じるのではなく、ゲストから向けられた“まなざし”を利用し、自分のものにつくりかえていくホストの実践に焦点を当てているからである。太田は、このようなホストの実践を、観光という力関係の行使に対する抵抗の実践と解釈している。

太田のように、ホストの抵抗の実践に焦点を当てた論者として川森[2001]があげられる。川森は、岩手県の遠野の語り手たちが外部から押し付けられた「ふるさとイメージ」をいかにとりいれ、自己のものにしていくかを論じている。語り部たちは、『遠野物語』が観光用に商品化される以前から口伝えの『遠野物語』を耳にしており、今でもその昔話が耳に残っているという。彼らは、前の世代から受け継いだ昔話に観光客が求める「ふるさとイメージ」を取り入れながら、観光用の『遠野物語』を語っているのである。川森は、この語りを通して、語り部たちが観光の場を自身で操作できる空間につくり上げていると説明し、その実践を、観光という支配的な力に対する抵抗であると結論付ける[川森 2001:78-79]。

川森は、ホストの実践に対して太田とほぼ同じ解釈をしている。太田の客体化論の主張の中で川森が特に関心をよせるのは、「より大きなシステムに属しながら、自身にとって意味ある生活を組織していくための抵抗の拠点をどのように設定していくか」[川森 1996:157-158]である。すなわち、川森は、抑圧的な構造の中に置かれたホストの抵抗の実践に関心を寄せているのである。

一方、安藤[2001]は、岩手県盛岡市の「さんさ踊り」の事例では、太田が前提とするような力関係の行使に抵抗する担い手の様相は確認できないという[安藤 2001:363]。現在、盛岡市には、以前から踊り継がれる「伝統さんさ」と夏祭りの時期に踊られる「観光さんさ」とがある。安藤は、伝統さんさの保護団体が、観光さんさとの距離を測りながら自分たちの踊りの真正性を主張し合う様子を描く。たとえば、これらの保存会は、「観光さんさ」ではない“本当の踊り”を学びにやってくる訪問者の意見や反応をとりいれて、それぞれの団体の独自性、真正性を主張する。安藤は、このようなゲストの言動をとりいれるホストを、ゲストに“まなざされ”“搾取される”存在ではなく、ゲストを“まなざす”存在と

とらえる。そして、このホストの“まなざし”を、訪問者を制して主体性を獲得するホストの実践であると解釈する [安藤 2001:359]。

安藤は、太田や川森のように、観光文化に対するホストの実践を抵抗とはとらえないが、ホストがゲストよりも高みにたつ [太田 2001:89] という太田の解釈に影響を受けていると考えられる。

以上、二者の論者の議論から、太田の客体化論を利用する二人の論者は、「ホストとゲスト」の間に力関係を想定し、その関係を逆転させるホストの“主体的”な実践に関心を持っていることがわかる。このようなホストの実践をとりあげることによって、演出行為論で演技や“偽物”と結論付けられてきたホストの実践に、積極的な意義を見出すことが可能となった。この点では、文化の客体化論が観光人類学にもたらした大きな進展であったといえるだろう。

3 客体化論の限界点

しかし、客体化論だけではとらえきれない「ホストとゲスト」のさまざまな相互関係があることも示しておかなければならない。問題は、客体化論が「ホストとゲスト」の間に横たわる差異を力関係としてのみとらえることにある。

太田は、観光におけるマクロ的な力関係の構造を、実際に現地で相互行為するひとつとが、語りや相互行為のレベルでどれほど認識しているかという問題に触れていない。つまり、漁民は、潜水の技術や鮎のうまさを観光客から賞賛されることで「ホストとゲスト」の間にある力関係を逆転した、あるいは中和したと考えているのか、そもそも漁民はこの力関係をどれほど意識しているのか、ということに関する記述がまったくないのである。「ホストとゲスト」の間に力関係を想定すると、そのような関係を意識していないホストとゲストの語りや実践、あるいは力関係ではとらえきれないホストとゲストのさまざまな関係をみえにくくしてしまう可能性がある。このような客体化論からは排除されてしまう事例として、橋本 [2001b] によるフィジーのエコ・ツーリズムの議論をとりあげる。

橋本 [2001b] は、「ホストとゲスト」¹³の間でダイナミックに創出され形成される、さまざまな観光文化を研究する必要性を説く。そのような観光文化の例として、橋本はフィジーにおけるエコ・ツーリズム開発をとりあげる。その事例を提示する中で、橋本は、現地のひとつとも自然保護の精神をもって対応するはずだ、というエコ・ツーリズム企画者や開発者の自己中心的な思い込みを批判し、「ホストとゲスト」の間の自然認識・文化認識に関する差異や、そのような文化的差異に対する両者の取り組みを明らかにする必要があると述べる [橋本 2001b:53]。たとえば、橋本は以下のような事例をあげて、この必要性を

¹³ 橋本は「ホストとゲスト」ではなく、「観光者と地元民」という用語を使用している。しかし、ここでは本稿の議論に沿うよう、「ホストとゲスト」という語に置き換えた。

説得的に説明する。

我々が山頂に登った後に、若い女性のガイドに連れられて英国からの女性客が一人登ってきた。帰り道で彼女が私のガイドにビニール袋に入ったビスケットをプレゼントした。彼はそれを食べた後、空になった袋をそこにおいて出発した。自分の畑に持ってきたビニール袋を置いていく感覚なのだろうと私は推測した。そのとき彼は地元の文脈における「道案内」をしていたのであり、「エコ・ガイド」という役割を演じていたのではなかったと気付かされた[橋本 2001b:61-62]。

橋本は、このような自身の経験から明らかとなった彼自身と地元民との認識ギャップを、エコ・ツーリズム開発者は最初に気付かなければならないという。そして、論考の最後では、今後の観光人類学が取り組むべき問題として「観光の場で何が語られ、何が行われているかを『濃密に記述』し、開発推進者と地元の人々との間にどのような対話がなされ、その地における観光がどのような姿をとっていくのか。とくに外部からやってくるエコ・ツーリズム開発者を地元民がどのように解釈し、『使用』『流用』しているのか」[橋本 2001b:64]という点をあげている。

橋本は、「ホストとゲスト」の差異に注目しつつも、太田のようにそれを観光のマクロ的な力関係に着目するのではなく、ホストとゲストのミクロ的な語りや相互行為から見出せる認識ギャップをとらえている。空のビニール袋を置いて出発する橋本のガイドの行為は、エコ・ガイドの役を演じたわけでもなければ、ゲスト（橋本）との力関係を逆転したり中和する行為でもない。橋本のガイドは、おそらく現地のやり方でビニール袋を置いたのである。橋本は明示しないものの、このガイドは、自分の行為がエコ・ガイドとしての行為に反しているとは考えていなかったにちがいない。さまざまな文化的背景をもつひとびとが集う観光地において、このようなホストとゲストの認識ギャップによるズレや誤解は日常的に繰り返されていると考えられる。

客体化論が提案したひとびとのさまざまな実践を、より深く、幅広くとらえるためにも、ホストとゲストの間に観光のマクロ的な力関係を想定するだけでなく、ホストとゲストの間の認識ギャップにも焦点をあてるべきではないか。この着眼点によって、力関係ではとらえきれないほど複雑で多様なホストとゲストの相互関係が見えてくるに違いない。

結論

本稿では、「ホストとゲスト」の相互関係を論じる手法として、演出行為論と文化の客体化論をとりあげ、その限界点を提示してきた。特に文化の客体化論については、今後の観光人類学の発展をふまえて、その利点と限界点を明確にしておきたい。客体化論は、ゲストがホストに対してもつ視点を、いかにホストが自身のアイデンティティや文化構築の

ためにとりいれているか、その実践を論じる上で有意義である。しかし、その実践を力関係を機軸にしてとらえることは、ホストとゲストの多様な相互関係をかえって見えにくくしてしまう。

先述したように、橋本は「ホストとゲスト」の差異を力の優劣ではなく認識ギャップととらえている。橋本がいうように、両者がそれぞれをどのように認識しあっているか、そこにはどのようなギャップがあるのか、そのギャップをホストとゲストはどのように対処しているのか、という現地の状況を緻密に追う必要があるだろう。

このような作業には、個別的な国や地域のひとびとに関する膨大な人類学的知識と詳細な地域研究が求められることはいまでもない。最後に、ホストとゲストの認識ギャップを考察する重要性を、Sharon Hepburn[2002]のネパールの事例から提示しておこう。

Hepburn はネパールの首都、カトマンズの観光地で見受けられた、「ツーリスト」という概念をめぐるホストとゲストの認識ギャップについて説明している。Hepburn によれば、カトマンズのひとびとにとって「ツーリスト」という用語は、文脈によって「白人」、ジャート¹⁴の一部、「不浄なひとびと」のように多義的であるという。そして Hepburn は、自身とネパール人女性の間で生じた「ツーリスト」という概念をめぐる認識ギャップについて、以下のような事例をあげている。

ネパール人女性が、私(Hepburn)に、パタン(カトマンズ渓谷の一都市)の病院にツーリストはいるかどうか尋ねた。彼女には、ツーリストがそこへいくならいい場所に違いないという想定があった(のだろうと私は思った)。答えは“ Yes ”だ。“ はい、ツーリストはそこへ行きます。いい病院ですよ。 ”と私はいった。彼女は、この研究者が彼女の意味することを理解できないでいることに困惑し、いらいらしているようだった。“ いいえ、そうではありません。 ”彼女は質問をゆっくりくりかえした。“ そこで働いているツーリストはいるんですね？ ツーリスト・ドクター？ ” [Hepburn 2002:620]

この事例は、「ツーリスト」という用語がネパールにおいてジャート(職業)の一部ととらえられていることを示している。この事例からわかる Hepburn とネパール人女性の認

¹⁴ Hepburn は、ネパールのカーストやジャートの古典研究である Hofer[1979]の研究を引きながら、ジャートがある特定の職業集団を示すというよりも、人間を“ 分割する ”という意味があるという。その分割基準は、人種、文化的・言語的特徴、国籍、カースト、民族、階級、職業というように、その時その場に応じて変化するという[Hepburn 2000: 616-617]。ネパールにおけるジャートは静的な基準をもたないというのが Hepburn の主張である。また、ネパールの民族誌研究者である名和も、「ジャートという概念はヒエラルキーによる人間の分類原理であり、行動規範である」[名和 2002:51]とし、Hepburn と同様、ジャートの複雑さを認めている。

識ギャップは、Hepburn が「ツーリスト」と「医者」を別個の用語と解釈しているのに対し、ネパール人女性は「ドクターというジャートを持つ者」として「ツーリスト」をとらえていたのである。

このような認識ギャップを考察するには、ネパールにおけるジャートの概念を整理することが不可欠である。それぞれの国や地域の特殊な社会的・文化的状況と関連付けて、ホストとゲストの認識ギャップを考慮する必要がある。そして、そのような認識のズレや格差から生じる両者のさまざまな相互関係を明るみにすることができるだろう。

参考文献

安藤 直子

2001 「観光人類学におけるホスト側の“オーセンティシティ”の多様性について」『民族学研究』66(3):344-363。

Boorstin, D.

1964(1981) *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*. New York: Harper & Row. (『幻影の時代 マスコミが製造する事実』後藤和彦, 星野郁美訳 東京創元社)

Chaney, D.

1993 *Fictions of Collective Life*. London: Routledge.

Cohen, Erik

1988 Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research*. 15:371-386.

Edensor, Tim

2000 Staging Tourism: Tourists as Performers. *Annals of Tourism Research*. 27(2):322-344.

江口 清信

1998 『観光と権力—カリブ海地域社会の観光現象』 多賀出版。

ゴドリエ, モーリス

2000 『贈与の謎』 山内昶訳 法政大学出版。

Greenwood, David J.

1977(1991) Culture by the Pound: An Anthropological Perspective on Tourism as Cultural Commoditization. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. V. Smith (ed), pp.171-185. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (「切り売りの文化—文化の商品としての観光における人類学的展望」『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』 三村浩史監訳)

pp.235-256 勁草書房)

Gregory, Chris. A

1982 *Gifts and Commodities*. London; New York: Academic Press.

Handler, R. and J. Linnekin

1984 Tradition Genuine or Spurious. *Journal of American Folklore*. 97 (385): 273-290.

橋本 和也

2001a 『観光人類学の戦略—文化の売り方、売られ方』 世界思想社。

2001b 「観光研究の再考と展望—フィジーの観光開発の現場から—」 『民族学研究』 66(1):51-66。

Hepburn, Sharon

2002 Touristic Forms of Life in Nepal. *Annals of Tourism Research*. 29(3): 611-630.

Hofer, Andras

1979 *Caste Hierarchy and the State in Nepal : a study of the Mulukiain of 1854*. Innsbruck: Universitätsverlag Wagner.

井野瀬 久美恵

1996 「大衆化か、差別化か？—トマス・クック社発展の影で」 『観光の二十世紀』 石森秀三（編） pp.27-42 ドメス出版。

石森 秀三

1996 「観光革命と二十世紀」 『観光の二十世紀』 石森秀三（編） pp.11-26 ドメス出版。

岩井 克人

1992 『ヴェニスの中の商人の資本論』 ちくま学芸文庫。

川森 博司

1996 「ノスタルジアと伝統文化の再構築—遠野の民話観光—」 『観光人類学』 山下晋司（編） pp.150-158 新曜社。

2001 「現代日本における観光と地域社会—ふるさと観光の担い手たち」 『民族学研究』 66(1):68-84。

MacCannell, Dean

1976 *The Tourist: A New Theory of Leisure Class*. London: Macmillan.

モース, マルセル

1962 『贈与論』 有地亨訳 勁草書房。

永淵 康之

2005 「観光 = 植民地主義のたくらみ」 『観光人類学』 山下晋司編 pp.35-44 新曜社。

Nash, Dennison

- 1977(1991) Tourism as a Form of Imperialism. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. V. Smith (ed.), pp.37-52. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (「帝国主義の一形態としての観光活動」『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』三村浩史監訳 pp.51-72 勁草書房)

名和 克郎

- 2002 「カーストと民族の間」 『ネパール』 石井博編 pp.46-54 河出書房新社。

Nunez, Theron

- 1977(1991) Touristic Studies in Anthropological Perspective. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. V. Smith (ed.), pp.265-279. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (「人類学から展望する観光活動の研究」『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』 三村浩史監訳 pp.367-387 勁草書房)

太田 好信

- 1992 「沖縄・八重山の<ウミンチュ体験コース>考」『中央公論』 8月号:333-339。
1993 「文化の客体化—観光をとめた文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』 57(4):384-410。
1996 「エコロジー意識の観光人類学—ベリーズのエコ・ツーリズムを中心に」『観光の二十世紀』 石森秀三(編) pp.207-222 ドメス出版。
2001 『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像—』 世界思想社。

Otto, T.

- 1992 The Paliu Movement in Manus and the Objectification of Tradition. *History and Anthropology*. 5:427-454.

Ritzer, G. and A. Liska

- 1997 “MacDisneyization” and “Post-tourism”: Complementary Perspectives on Contemporary Tourism. In *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory*. Rojek, C. and J. Urry (eds.), pp.96-109. London: Routledge.

Smith, Valene (ed.)

- 1977(1991) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』 三村浩史監訳 勁草書房)

Thomas, Nicholas

- 1992 Inversion of Tradition. *American Ethnologist* 19:213-232
1994 *Colonialism's Culture: anthropology, travel and government*. Cambridge:

Polity Press.

内堀 基光

1997 「もの与人から成る世界」『「もの」の人間世界』 pp.1-22 岩波講座文化人類学 第3巻 岩波書店。

アーリ, ジョン

1989 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』 加太宏邦訳 法政大学出版局。

山下 晋司

2000 『バリ—観光人類学のレッスン』 東京大学出版会。